

生成 AI 特許調査サービス「サマリア」の 「特許検索競技大会 再現率 100%（上位 30 件）」

プレスリリース検証

調査報告 2026 年 9 月 12 日

Claude Fable 5.1

1. 要旨

- ・ 本プレスリリース（2026 年 9 月 10 日、パテント・インテグレーション株式会社発表）は、同社の特許 AI アシスタント「サマリア」が 2024 年度特許検索競技大会アドバンストコースの過去問（電気・機械・化学医薬の 3 分野、正解特許計 26 件）において、新機能「類語ソーラス拡張」の適用により上位 30 件の確認で全分野再現率 100%を達成したとする**自社検証**の結果である¹。第三者検証ではなく、正解 26 件という規模について同社自身も「統計的な有意性を主張する規模ではない」と留保している¹。
- ・ 「再現率 100%」は正解 26 件の全捕捉を意味するが、①正解件数が少ない（電気 4／機械 8／化学・医薬 14 件）、②過去問の正解は市販・公開されており学習データへの混入（データリーク）を排除できない、③適合率は上位 N 件をヒットリストとした暫定値で母集団総件数が未取得、という 3 点で、実務における網羅性の保証と同一視することはできない（分析）。
- ・ サマリアは特許読解・調査支援 AI（ビジネス IID 月額 8,000 円、コーポレート年額 24 万円³）で、検索式生成と AI スクリーニングを組み合わせたハイブリッド型と推定される。競合（Patentfield、Amplified 等）も独自ベンチマークを掲げるが、競技大会過去問に基づく横並び比較は現時点で不可能である。実務では最終確認を人手で担保する前提は変わらず、サーチャー・弁理士の役割は「検索実行」から「観点設計・結果検証」へ移行するとみるのが妥当である（分析）。

2. 発表主体と一次情報

2.1 発表企業

- ・ 発表企業はパテント・インテグレーション株式会社（東京都千代田区九段南 1-5-6 りそな九段ビル 5 階）。代表者は大瀬佳之氏（Founder CEO・弁理士）。設立 2002 年 6 月、資本金 900 万円、未上場¹。
- ・ 発表日時は 2026 年 9 月 10 日 10 時 00 分、PR TIMES（企業 ID 86119、リリース番号 28）¹。

2.2 サービス概要

- ・ サービス名は「サマリア（Summaria）」。2023 年 4 月に特許文書読解支援 AI として提供を開始し、2024 年 5 月 27 日に拒絶対応を支援するワークフロー型 AI エージェント（「拒絶支援ワークフロー機能」）を搭載した^{1,4}。
- ・ 「特許情報サービス事業者として日本初となる AI エージェントを搭載」との表記は、国内で特許・実用新案を対象に提供される特許情報サービス 25 サービスを対象とした Web 調査（2024 年 5 月 27 日時点の当初調査に加え 2026 年 9 月 8 日時点で継続調査、当社調べ）に基づく**自社調査**であり、第三者認定ではない¹。
- ・ 料金体系（公式サイトで確認）：ビジネス（一般個人ライセンス）月額 8,000 円・年額 80,000 円、アカデミック（学生・公的研究機関）月額 4,800 円・年額 48,000 円、コーポレート（複数ユーザー）年額 240,000 円。IID の共有は禁止³。同社は 2025 年 1 月に ISMS 認証（ISO27001）取得を公表している⁶。
- ・ 2026 年 9 月 8 日には「サマリア MCP」の提供を開始し、Claude・ChatGPT・Copilot・Gemini Enterprise からサマリアのデータベースへ直接アクセスできるとしている⁵。

3. 検証内容の整理（プレスリリース本文に基づく）

項目	内容
対象過去問	2024 年度 特許検索競技大会アドバンストコース。今回は「検索集合の網羅性を問う設問」を使用。前回（2026 年 2 月）リリースでは「問 2 設問(4)・設問(5)」と明記 ^{1,2}
分野・正解件数	電気 4 件、機械 8 件、化学・医薬 14 件（計 26 件） ¹
評価指標	再現率（正解特許のうち結果に含まれた割合）。「上位 30 件」は AI スクリーニング後の関連度スコア上位 30 件を人手で確認する範囲 ¹

項目	内容
結果	検索集合段階で電気 4/4・機械 8/8・化学医薬 14/14 を捕捉。1 次スクリーニング後、上位 30 件の確認で 3 分野とも再現率 100% ¹
手法	新機能「類語シソーラス拡張」を検索式拡張に適用し、既存の AI スクリーニングで 1 次スクリーニング。問題文をそのまま入力する以外に人手による調整はないと記載 ¹
実施主体	パテント・インテグレーション株式会社（自社検証。第三者検証ではない） ¹

3.1 「類語シソーラス拡張」の定義

リリースによれば、過去の拒絶理由通知書 10 万件以上から、審査官が本願発明と引用文献の用語・概念を対応するものと認定した事例を抽出し、調査時の類語辞書として整備した機能である。統計的な共起関係ではなく「審査という実務の場で現に成立した言い換え」を根拠とする点を特徴として掲げている¹。

3.2 前回検証（2026 年 2 月）との比較

前回リリースは「集合上位 100 件で再現率 85%以上」としつつ、上位 100 件確認時点で機械 87.5%・化学医薬 85.7%にとどまっていた²。今回は確認件数を上位 100 件から 30 件へ圧縮し、査読時間（1 件 3 分想定）を約 5 時間から約 1.5 時間（約 7 割削減）と試算している¹。機械分野では、キーワード・分類スコアで集合順位 382 位だった文献が査読順位 23 位まで上昇し、確認件数が 16.6 倍に圧縮されたとする¹。

3.3 同社自身の留保

リリースは「本結果は 3 分野・正解特許計 26 件を対象としたものであり、統計的な有意性を主張する規模ではありません」「母集団の総件数は未取得のため、適合率はすべて上位 N 件をヒットリストとした場合の値です」「拒絶理由通知書の蓄積が薄い技術分野で同様の効果が得られるかは、本ベンチマークからは判断できません」と明記している¹。限界を自ら開示している点は、評価上むしろ誠実性の担保として捉えられる（分析）。

4. 特許検索競技大会の背景

- ・ 主催は一般財団法人工業所有権協力センター（IPCC）。英名は Patent Search Grand Prix（PSGP）。2007 年に関西特許情報センター振興会の記念事業として開始、2008 年から INPIT、2013 年から IPCC 主催。「知的財産推進計画 2008」に基づき実施される、特許調査実務能力を競う国内唯一の大会とされる^{7,10}。
- ・ コース構成：上級者向けアドバンストコース（試験 4 時間、商用特許検索 DB を使用）と初級者向けファーストステップコース（旧スチューデントコース、90 分、J-PlatPat を使用）。アドバンストは共通問題に加え、機械・化学医薬・電気の 3 分野から 1 分野を選択する⁷。
- ・ 過去問の公開状況：Japio が販売。アドバンストコース過去問は書籍（税込 1,320 円）、ファーストステップコースは無料ダウンロード。出題・解答例・解説は市販・公開されている^{8,9}。
- ・ 採点方式（IPCC 公開資料に基づく）：素点を偏差値化し、共通問題と選択問題の偏差値の加重平均で評価。認定基準はゴールド（合計偏差値 65 以上かつ各設問 55 以上）、シルバー（同 60・50）、ブロンズ（同 55・45）と説明されている^{7,8}。再現率そのものを合否閾値とする公式の明記は確認できず、相対評価（偏差値）方式である。直近の「特許検索競技大会 2024」ではゴールド認定 7 名と公表されており⁸、全参加者中数名という難関である（2023 年大会のゴールド認定は 3 名とされるが、Web 公開範囲で一次確定値は直接取得できていない。未確認）。
- ・ 問 2 設問(4)・(5)の性格：作成した検索母集団に正解特許をどれだけ網羅できたか（再現率＝網羅性）を評価する設問。設問(5)は同一出願人・権利者を除外して計上し、実際の抽出対象は 3 件（前回のサマリア検証では評価安定性のため上位 10 件に緩和）²。この設問構造・正解件数の記述は主に同社リリースに依拠しており、IPCC の一次資料では裏取りできていない。

5. 「再現率 100%」の実務的意味（分析）

- ・ 構造上 100%が出やすい：分母が小さく（4・8・14 件）、確認枠が上位 30 件と比較的広い。母集団を適切に取れば 100%到達は起こりやすく、統計的頑健性は乏しい。同社もこの点を明言している¹。
- ・ データリーク（コンタミネーション）のリスク：過去問・解答例・解説は Japio から市販され⁹、フィードバックセミナー資料等でも流通する。正解特許が公開情報として存在し、

LLM の学習データや検索対象 DB に含まれる可能性を排除できない。「未知の正解」を探す実案件（FTO・無効資料調査）と、「既知の正解」を再発見する過去問検証は本質的に異なる。この点はリリースで検討されていない。

- ・ **人間受験者との比較は困難**：採点は偏差値方式であり、人間受験者の再現率の典型値を示す公式数値は一次資料で確認できなかった。前回リリースの「上位受験者と同等以上」²との表現は、指標定義が異なるため厳密な同一土俵比較とは言えない。
- ・ **適合率の扱い**：母集団総件数が未取得のため、適合率は「上位 N 件をヒットリスト扱いした場合」の暫定値であり真の適合率ではない。「再現率と適合率が両方改善」との主張はこの限定下での結果である¹。

6. 技術方式（一次情報と推定）

- ・ サマリアは当初「検索機能を持たない読解支援 AI」であり、検索は J-PlatPat や商用 DB に委ねる設計であった（大瀬 CEO の note 記事による¹⁹）。2025 年末に技術顧問・角淵由英弁理士監修の「調査支援ツール」を追加し、検索式生成と AI スクリーニング（関連度スコアリング）を組み合わせる構成へ発展したと整理される²⁰（推定を含む）。
- ・ 検索式は J-PlatPat の論理式形式を想定していると推定される。役割分担は「特許 DB で母集団を取得し、生成 AI で分析・スクリーニングする」構成である（推定）。
- ・ 同社は日米欧中 4,500 万件以上の特許公報を収録した自社 DB を保有し、日本は日次、米国・国際公開は週次、欧州・法的状態は月次で更新するとしている⁵。
- ・ 使用 LLM の具体名、埋め込みモデルの種類、ベクトル検索の詳細は一次情報では**未確認**。

7. 競合・類似サービスとの比較

- ・ **Patentfield**：約 8,000 万件の公報を生成 AI で要約収録。生成 AI オプション「Patentfield AIR」は、単語の一致ではなく検索クエリの文章の意味・意図を捉えることで適合率が約 3.8 倍に向上すると標榜する¹¹。
- ・ **Amplified（株式会社 amplified ai）**：1.4 億件超の特許を学習し、100 万件を超える過去の審査と無効調査に対する検証で成功率 87.33%を記録した等と標榜する¹²。
- ・ **その他**：AI Samurai、Tokkyo.Ai、PatSnap 等が国内外で提供されている。

- ・ **横並び比較の可否**：特許検索競技大会の過去問で再現率を公表している競合は確認できなかった。各社の指標は母集団・正解定義・検証手法が異なり、数値の直接比較は不可能である。前回リリースは Perplexity Patents・ChatGPT Deep Research・Gemini Deep Research との比較を掲載したが、これらはコンプライートサーチを目的としないため目的が異なると同社も注記している²。
- ・ **係争関係（文脈として重要）**：パテント・インテグレーションは Patentfield 社に対し 2024 年 10～12 月に 4 件の特許権に基づく 6 件の侵害訴訟を提起し¹⁴、amplified ai 社に対しても 2025 年に 2 件の侵害訴訟を提起した¹³。Patentfield 社との一連の訴訟は 2026 年 4 月 17 日、東京地裁で民事調停法 17 条に基づく調停に代わる決定が確定し、残余事件の取下げにより全件終了した^{15,16}（侵害の成否を判断した公開判決は確認されていない）。本リリースは、同社が競合を特許で牽制する競争環境下で発信されている点を割り引いて読む必要がある（分析）。

8. 反響と特許庁の動向

- ・ 業界内では技術顧問の角淵由英弁理士（レクシード・テック、特許検索競技大会実行委員長）らが肯定的に紹介し、X 上では大瀬氏が積極的に発信している（各投稿の URL は未確認）。導入先としてパナソニック、カヤバ、HOYA 等の企業や弁理士法人 IPX 等の特許事務所が同社リリース類で挙げられている（自社発表ベース）^{1,2}。
- ・ 本リリース単体に対する、独立した弁理士・サーチャー・企業知財部門からの批評的検証や、日刊工業新聞等の独立報道は、調査時点では確認できなかった（**未確認**）。反響は主に発信側・関係者経由にとどまる。
- ・ 特許庁の動向：「特許庁における人工知能（AI）技術の活用に向けたアクション・プラン」令和 7 年度改定版では、実証事業の結果を踏まえ「先行技術調査②（検索手法の高度化）」を導入フェーズへ移行し、「生成 AI の特許審査業務への適用」を新設した¹⁷。特許庁はさらに AI 活用の基本方針「JPO AI ビジョン」を公表している¹⁸。公的にも AI による先行技術調査が実証から導入段階へ進む流れにあり、本サービスの方向性と整合する。

9. 検証設計の妥当性に関する論点整理

本リリースの技術的貢献の核は、「母集団を増やしても解消しなかった取りこぼしが、審査官認

定事例に基づく語彙で検索式を組み直すことで解消した」という仮説である¹⁾。「検索の失敗は件数不足ではなく語彙不足に起因する場合がある」という実務者の直観と整合し、拒絶理由通知書 10 万件からの類語抽出という着想自体は独自性が高い（分析）。

一方、検証設計としては次の弱点がある（分析）。

- ・ サンプルの小ささ：3 分野・26 件では偶然性を排除できない。
- ・ 過去問検証の限界：正解が既知・公開情報であり、実案件の未知の網羅性を保証しない。データリークの検討が欠落している。
- ・ 問題選定の説明不足：2024 年度・問 2 設問(4)を選んだ理由、他年度・他設問での再現性が示されていない。
- ・ 適合率の暫定性：上位 30 件の外にどれだけノイズ・見落としがあるかは評価対象外である。
- ・ 人手確認の残存：「上位 30 件の確認」自体は人間が行う前提であり、AI が自律的に正解を保証するわけではない。

これらは同社の留保文と概ね一致しており、リリースは誇大表示というより「限定条件付きの上限性能の実証」と読むのが公正である。ただし見出しの「再現率 100%」という表現は、限定条件を捨象して独り歩きしやすい。

10. 知財実務への示唆と推奨

- ・ **段階 1（評価）**：本結果を「特定過去問での上限性能の実証」と理解し、正解が未知の自社実案件（FTO・無効・先行技術調査）でパイロット検証を行う。過去に人手で完了した案件の正解集合を用い、再現率・適合率・査読工数削減を自社データで再現できるかを確認する。判断の閾値は「実案件で人手同等以上の再現率、かつ査読工数 3～5 割減」を満たすか否かである。
- ・ **段階 2（限定導入）**：技術動向調査・分類付与・スクリーニング等、見落としの許容度が相対的に高い業務から導入する。FTO・無効調査では 1 次スクリーニングに限定し、人手による最終確認を必須とする運用ルールを文書化する（リリース自身も、慎重な判断が求められる査読工程は人手による最終確認を併用すると述べている¹⁾）。

- ・ **段階 3（本格運用）**：拒絶理由通知の蓄積が厚い分野（電気・機械等）を優先する。蓄積の薄い新興分野では効果が不確実である点を前提に、他ツール（Patentfield AIR、Amplified 等）との併用・比較を継続する。
- ・ **ツール選定の視点**：公開ベンチマークの数値そのものより、①正解集合の作り方、②母集団件数、③真の適合率、④確認工数、⑤データリークの有無、⑥セキュリティ（ISMS 等）、⑦ベンダーの法的リスク（係争状況）を精査する。第三者による独立検証や、複数年度・複数設問での再現性データの公表が、評価を変える指標となる。
- ・ **サーチャー・弁理士の役割**：検索式の起草・実行から、調査観点の設計、AI 出力の妥当性検証、見落としリスクに関する説明責任へ重心が移る。AI が母集団作成と 1 次スクリーニングを担う分、人間には「何を正解とみなすか」を定義し、AI の結果を検証する能力がより強く求められる（分析）。

11. 留意事項（未確認事項・限界）

- ・ 本検証はパテント・インテグレーションによる自社検証であり、独立した第三者検証ではない。
- ・ サンプルは 3 分野・正解 26 件と小規模で、同社自身が統計的有意性を否定している。
- ・ 特許検索競技大会の過去問・解答は市販・公開されており、データリークの可能性を排除できない（リリースでは未検討）。
- ・ 適合率は「上位 N 件をヒットリストとした場合」の暫定値であり、母集団総件数は未取得である。
- ・ 大会の採点は偏差値方式であり、人間受験者の典型的再現率を示す公式数値は一次資料で確認できなかった。
- ・ 使用 LLM の具体名、埋め込み・ベクトル検索の技術詳細、2023 年ゴールド認定人数の一次確定値、本リリースへの独立した批評・報道は未確認である。
- ・ 設問(4)・(5)の構造・正解件数の記述は主に同社リリースに依拠し、IPCC 一次資料では裏取りしきれていない。
- ・ 発表企業は競合他社（Patentfield、amplified ai）と特許係争関係にあった／ある点を踏まえ、本リリースは競争環境下の発信として読む必要がある。

参考文献

- [1] パテント・インテグレーション株式会社「生成 AI による特許調査サービス『サマリア』、特許検索競技大会の過去問検証で電気／機械／化学・医薬の3分野で再現率 100%(上位 30 件)を達成」PR TIMES、2026 年 9 月 10 日（企業 ID 86119・リリース番号 28。会社概要はリリース末尾の会社情報欄）。<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000028.000086119.html>
- [2] パテント・インテグレーション株式会社「特許検索競技大会の問題に『サマリア』が挑戦。集合上位 100 件について 85%以上の再現率を達成！／導入実績 360 社超を誇る中小企業向け知財管理システム『root ip クラウド』とサービス連携を開始」PR TIMES、2026 年 2 月 12 日（リリース番号 18）。<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000018.000086119.html>
- [3] パテント・インテグレーション株式会社「サマリア 料金・ライセンス」（公式サイト）。
<https://patent-i.com/ja/buy/>
- [4] サマリア公式サイト。<https://patent-i.com/summaria/>（リリース記載の URL。本調査ではページ内容を個別には検証していない）
- [5] パテント・インテグレーション株式会社「生成 AI で特許業務を効率化する『サマリア』、MCP に対応。Claude・ChatGPT・Copilot・Gemini Enterprise からサマリアデータベースへ直接アクセス可能に」PR TIMES、2026 年 9 月 8 日（リリース番号 29）。
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000029.000086119.html>
- [6] パテント・インテグレーション株式会社「ニュースリリース」一覧（ISMS 認証取得 2025 年 1 月 6 日、訴訟提起 2024 年 10 月 28 日ほか）。<https://patent-i.com/ja/news/>
- [7] 一般財団法人工業所有権協力センター（IPCC）「特許検索競技大会について」。
<https://www.ipcc.or.jp/contest/about/>
- [8] 一般財団法人工業所有権協力センター（IPCC）「過去の大会」。
<https://www.ipcc.or.jp/contest/past/>
- [9] 一般財団法人日本特許情報機構（Japio）「特許検索競技大会 過去問題集」。
https://japio.or.jp/service/service04_05.html
- [10] Weblio 辞書「特許検索競技大会」。
<https://www.weblio.jp/content/%E7%89%B9%E8%A8%B1%E6%A4%9C%E7%B4%A2%E7%AB%B6%E6%8A%80%E5%A4%A7%E4%BC%9A>
- [11] Patentfield 株式会社「Patentfield パテントフィールド | AI 特許分析プラットフォーム」（公式サイト）。<https://product.patentfield.com/>
- [12] AI Market「特許調査プラットフォーム『Amplified』 | 株式会社 amplified ai」。<https://ai->

market.jp/service/amplified/

- [13] パテント・インテグレーション株式会社「AI 特許調査プラットフォーム『Amplified』に対する 2 件の特許権侵害訴訟提起のお知らせ、2025 知財情報フェア & コンファレンス出展のお知らせ」PR TIMES、2025 年（リリース番号 14）。
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000014.000086119.html>
- [14] パテント・インテグレーション株式会社「生成 A I に関する特許権侵害訴訟の追訴提起について（3）」2024 年 12 月 25 日。<https://patent-i.com/ja/news/86/>
- [15] パテント・インテグレーション株式会社「Patentfield 株式会社と当社との間の特許権侵害訴訟の終了のお知らせ」2026 年 4 月 17 日。<https://patent-i.com/ja/news/88/>
- [16] Patentfield 株式会社「パテント・インテグレーション株式会社と当社との間の特許権侵害訴訟の終了のお知らせ」PR TIMES、2026 年 4 月。
<https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000062.000025380.html>
- [17] 特許庁「特許庁における人工知能（AI）技術の活用に向けたアクション・プランの令和 7 年度改定版について」。https://www.jpo.go.jp/system/laws/sesaku/ai_action_plan/ai_action_plan-fy2025.html
- [18] 特許庁「特許庁における AI 活用の基本方針『JPO AI ビジョン』について」。
https://www.jpo.go.jp/system/laws/sesaku/ai_action_plan/ai_vision/
- [19] 大瀬佳之（パテント・インテグレーション代表）による note 記事（サマリアが検索機能を備えず、J-PlatPat・商用 DB と併用する設計である旨の記載）。URL 未確認（本調査で参照した二次情報）
- [20] 角淵由英（レクシード・テック／特許検索競技大会実行委員長）による note 記事等（J-PlatPat 論理式・近傍検索の解説、サマリア調査支援ツール監修に関する記載）。URL 未確認（本調査で参照した二次情報）